

「コドモノミライ—現代演劇とこどもたち」展 + 「人形劇、やばい！」展評

チェン ドミニク

2019年11月から12月まで演劇博物館で開催された『コドモノミライ—現代演劇とこどもたち』と『人形劇やばい』の二つの展示を観てきた。わたしは演劇を専門的に論じられる者ではないが、子育て中のメディア論者として両展から大いに思考を刺激されたので、感想を徒然と記してみる。

『コドモノミライ』展では、日本で20世紀初頭から現代まで実践されてきた児童劇の歴史がまとめられていた。当初は子供向けであったお伽劇が、次第に子どもが主体的に演じる側に回ったり、子どもをめぐる問題が主題となっていく流れが興味深い。中でも、日本の最初の近代的なお伽劇が、軽妙な節回しの上に痛烈な社会批判が展開される「オッペケペー節」で有名になり、自由民権運動に身を投じた川上音二郎の一座によって1903年に開催されたこと、それから20年ほど経った後に、坪内逍遙が「社会改造」を標榜して児童劇の理論を構築していったという歴史の流れには、子どもと演劇に共通するテーマが見え隠れしているように思える。ここでは、演劇を介した子どもたち自身の学習の次元について考えさせられた。

本展の後半では、戦後の日本で開催され

てきた数々の児童劇のポスターが展示されていた。取り扱われるテーマは戦争、犯罪と非行、就学や就労、性的マイノリティなどで、それぞれの劇が制作された時代背景を反映していることがわかる。素人目で見ても、これだけ多様な社会問題の児童劇が制作されていることには驚かされたし、一人の子の親として少なからず希望を抱かされた。わたしは日本の学校に通ったことがなく、子どもも同様なので、小中学校でどのような社会教育が成されているのか詳しくない。しかし、日本の新聞の報道やテレビ放送には、多様な社会的マイノリティへの眼差しが欠如していると感じることが多く、一外国人として暗澹たる気持ちにさせられることが多い。そのため、子どもの学習のために、家ではテレビは受信していない。本展で知った児童劇の多くは、そのような社会的現実像の欠落を穴埋めしてくれるように感じられたのだ。

なぜそのように感じたのか。まだ記憶容量が飽和してない子どもたちは、非常に素直に様々な情報を摂取する。大人の世界の事情の全てを子どもに伝えるべきとは思わないが、それでも知っておいてほしいと思う

ことはある。わたしの場合は、社会のメインストリームから排除されたり、無視されてしまいがちなマイノリティの存在を早いときから知ってもらうことで、多様な他者に対する包摂的な視点を養ってほしいと願っている。もちろん、そのような期待役割は、児童劇以外にも、児童文学が担ってきたとも言えるだろう。それでは児童文学の読書と児童劇の鑑賞というメディアの違いはなんだろうか。

これもまた極私的な観察に拠った見方に過ぎないのだが、小学校低学年の子どもを演劇に連れていく時、彼女の注意の駆動の仕方にも目を向けると、まず美しいものや可愛いものに目を奪われる。言葉が難解だったり、人物の相関が複雑だったりすると認知限界を迎えるのか、そっぽを向いてしまう。たとえば、我が家では家族で時折、能を鑑賞しに行くのだが、ほとんどの場合はつまらなそうな顔をしている。大人でさえも、謡本に通曉していなければ意味がわからない台詞回しなので当然といえば当然なのだが、時としていきなりスイッチが入るように舞台を凝視しはじめる。それは多くの場合、物語の登場人物がある困難に見舞われている瞬間だ。そのような時、観劇中であるにも関わらず、「あの人がどうなっちゃうの?」と心配そうに聞いてくる。そうして、困難の状況が解消されるまで、食らいつくように舞台を見ている。

同様の状況は、就寝前に絵本を読み聞かせる時にも起こる。物語の起承転結の節目に差し掛かるたびに、うとうとした表情が「どうなっちゃうの?」と集中した顔つきに変

貌する。最終的に物語の山場を越えて、多くの場合はハッピーエンドの決着に至ると、安堵したように寝付く。小学校に入るまでは自分で本を読むということはありませんでした。そのため、基本的に本は親が読み聞かせるものだった。小学二年に上った今では、日本語やフランス語の児童書を声を出して読んでいるが、黙読はまだ始まったばかりという感じだ。この変化はおそらく、それまでは他者の声によって立ち上がっていた想像の世界を、自分の読み上げの音声、その次に内声によって立ち上げられるようになる発達過程の推移なのだろう。

翻って演劇鑑賞の場合に目を向けると、舞台上の演者たちの圧倒的な存在感によって、眼前に物語世界が立ち上がる。子どもには意味不明な能の場合ですらも、体の所作や声色を通して、物語の緊張と弛緩に心を奪われる。読書行為が自分の音声や内声というミニマルな媒介に依拠した世界の立ち上げ方であるとするならば、演劇鑑賞は複数の他者の体、声に加えて、音響と振動、視覚的な舞台装置と、子どもを包囲する環境全体を使って物語世界に没入させるものだ。

自力でイメージを展開し、感情移入する訓練を受けていない子どもにとって、演劇鑑賞の体験は補助線を引いてあげる役割を果たすのだろう。さらに、映画やアニメなどの二次元の表象とも異なるのは、やはり演者の生身の体が介在している点が大いように思われる。自分と同じ身体を持つ演者を観ているときに引き起こされるのは、感情移入というよりは「身体移入」なのではないだろう

うか。それは、よりヴァーチャルな、つまり感覚意識体験の実質が同じであるような物語体験の受容につながる。

「身体移入」とは、障害者の知覚を研究する伊藤亜紗が、『記憶する身体』（春秋社）で記述している現象だ。意識より手前の、無意識の次元で、ある感覚が惹起されること。たとえば、他者の体の怪我を見た時、その痛みがこちら側に移入してくるように感じられる。そのような経験は誰にでもあるだろう。脳神経科学の分野では、ミラーニューロンという神経細胞が情動伝染を起こすということが解明されてきた。情動は「felt emotion」（知覚された感情）であり、「perceived emotion」（認知された感情）とは区別される。意識に立ち上る以前のクオリアが個人間で伝染することが様々な心理学の実験で研究されてきた。読書は、文字によって表象されたものを意識上で読み解き、そこから「逆算」して身体的なクオリアを立ち上げるメディア体験だが、演劇鑑賞はもっと直接的な情動伝染を経由する認知体験なのかもしれない。この比較は、映画やアニメと演劇の場合においても、同質だろうと思う。

さらにいえば、登場人物の行為主体性（agency）の知覚を考えてみれば、演劇におけるそれは圧倒的である。生身の人間の行為主体性、つまりその人の実在感、もともと文字や映像の知覚と比べて、高い。児童心理学者のMurrayとTrevarthenによる1980年代の有名な実験¹⁾では、乳児と母親を別室に隔離し、TVモニターで互いの様子

を映し出した。最初の段階では、TVモニターの映像をリアルタイムで中継した。すると、ブラウン管の母親の映像を見て、乳児は如実に反応を示し、まねっこ遊びのような同期的相互作用が生じた。しかし、次の段階で、母親の映像を録画したものに差し替えた途端、乳児は飽きてしまい、同期が生まれなくなった。この実験は、ブラウン管の映像という同じ視覚上の情報量でも、リアルタイムと録画で、言語や認知が未発達な乳児においてさえも、有意な認識の差異があることを示した。近年、別の研究グループによって、スマートフォンの画面を一週間見せなかった小学生たちのグループが、普通にスマートフォンを使用していた子どもたちのグループと比較して、他者との共感能力が有意に向上したという実験²⁾があった。二つの実験に共通しているのは、リアルタイムな他者の身体へ注意を向けるという点だが、子どもの発達における演劇鑑賞の影響を考える上でヒントになりそうだ。

同時期に別館で開催されていた『人形劇やばい』展も、コンパクトながら非常に密度の高い展示だった。マリオネットを動かしてみるコーナーがあり、わたしも挑戦してみたが、人形遣いの快樂に一瞬浸ることができた。ここでは近現代の人形劇の歴史に焦点が当てられていたが、日本の文脈でいえば人形浄瑠璃の系譜や、現代におけるVirtual YouTuberやゲームのアバターなどのデジタル表象との関連性についてもっと知りたいと思わされた。特に興味を惹かれたのは、日本のダダイスト村山知義が製作し

た『子を生む淫売婦』(1925)のように、戦前の人形劇では児童ではなく大人を対象にした作劇が多く、戦後に『ひょっこりひょうたん島』(1964～1969)によって子供向けというイメージが普及した後も、登場人物の腹を包丁で切り裂く場面のある別役実の『青い馬』(1972)のように、過激な演出が開拓されていった点である。本展のキュレーターたちは、「過激でかわいくて、かっこよくも危なっかしい」人形劇の本質を「やばい」と形容してみせたが、非生命物としての人形に物語を仮託することの「やばい」面白さは、生身の人間による児童劇を扱う『コドモノミライ』展を見た後には対照的で、特に興味深かった。非生命だが、物理的な存在感を放っている人形の体に、わたしたちはいかにして身体移入するのだろうか。考えは尽きない。

エナクティブ認知心理学の立場では、人の意識は行為主体と環境との相互作用を通して「上演」= enact されるものだ、と考えられている。この立場は、20世紀を通して、ベルタランフィの一般システム理論からウィーナーのサイバネティクスを経由し、ピ

アジェの発達心理学、マトゥラーナとヴァレラ生命システム論を通過し、同時代の整体心理学、ドゥルーズの哲学やペイトソンのコミュニケーション理論とも呼応しながら、徐々に醸成されてきたものだ。そこに人の意識は使う道具によって変形されるというマクルーハンのメディア論をも接続すれば、児童劇や人形劇を含む演劇というメディアの分析と他の現代的なメディア装置との比較を通して、人間の意識、記憶そして学習についての知見が深められるに違いない。その意味において、演劇は今日においてなお、「社会改造」の契機を多分に孕んでいるのだとも言えるだろう。

注

- 1) Murray L., Trevarthen C., The infant's role in mother-infant communications, *J Child Lang.*, Feb 13(1), 1986, pp. 15-29.
- 2) Uhls Y.T., et al., Five days at outdoor education camp without screens improves preteen skills with nonverbal emotion cues, *Computers in Human Behavior*, 2014, (39) pp. 387-392.

(ちえん・とみにく 早稲田大学文学学術院 准教授)